

# ロックにおける観念と実在

大塚賢司

## 序

§ 1 我々は外的事物を如何なる仕方で知るのであろうか。今例えば「知覚されることから独立に、外的実在的世界が存在する」という主張を考えてみる。この考えによると実在的世界は知覚によって経験される世界とは重なり合わず、両者は異なる二世界となる。そして更に直接的知覚を経験の実質的意味内容と見做す立場(初期Logical Positivism)にたてば、「外的実在的事物」なるものについて真偽判定がなされるのは原理上不可能であり、上の命題は無意味と見做されざるを得ない。かかる外的事物の想定は、Berkeleyを始めとして多くの哲学者達から悪しき抽象の産物に過ぎぬと指摘されてきた。

上の命題を有意味なものとするためには、採るべき二つの方途が考えられ得る。第一は直接経験とは異なる真偽基準の導入であり、第二は経験概念の根本的再検討である。

第一の途について、一般に直接経験以外の真偽基準として、分析的命題が示す論理的基準や「帰納的推論、類比的推論、千里眼や第六感や迷信<sup>(1)</sup>」の類まで含め多様な真偽基準とそれに応じた意味の形成が考えられ得る。しかし、問題となる上述の当の命題は外界認識の最も基礎的な部分に関するものであり、それが相対化された真偽基準に応じて多様な意味体系を成すとしても、それは確定的、唯一的な理論の探求のためには十分なものではない。

従って我々は第二の方途を採るべきであり、「知覚から独立に存在する」外的事物が、それにも拘らず何らかの仕方で「知覚によって知られている」という一見矛盾する事態を可能にし得る経験概念の検討が必要である。

検証理論が成立するためには、その意味が問題となっている他の命題(被検証命題)の検証が、その命題の検証に依存するような命題つまりその真偽条件が確定され得る命題(検証命題)が必要である。そして外界存在に関する命題に於いては、真偽条件が確定され得るだけでなく、現に確定されていることが必要である。この条件を可動的なものせず、まさに一つの確定的なものにするということが外界認識論の実際の形成に他ならない。外界認識に於いては真偽条件を規約主義的、相対主義的に分類して「解決」するのではなく、経験や知覚という概念の検討を通じて外界を真に把握するための条件を唯一的に示すという解決こそが必要なのである。この問題は、哲学が避けて通ることのできぬ根本的な問題であると思われる。経験の、知覚の、分析に基く解釈に上述の命題の真偽条件は、従って検証可能性は決定的に依存するのである。ではかかる外界の認識に於いてそれに真理性を備えるに至らしめる知覚や経験は如何なる構造を持つのであろうか。

§ 2 外界認識に関わる知覚の理論として哲学史上有力なものは「知覚表象説」(the representative theory of perception)である。それは一般的には次のように要約される。

〔Ⅰ〕 人間が外界を認識するのは、外的事物から始まり、感覚器官、神経、大脳へと伝達される物理的、身体的運動の因果過程の最終的な結果、産物である知覚表象による。

〔Ⅱ〕 この認識に際して直接の手掛りとして我々に与えられているのは、それ自体としては外的事物に始まり脳過程に至るまでの過程とは全く異質の、内的知覚表象に限られる。ところが〔Ⅱ〕を一度承認すると、我々にとって直接所与である内的知覚表象が外的事物と関りを有するという保証が得られぬという事態が論理的に帰結する。従って外的事物の存在及び、外的事物と内的表象との関係とが不可知なものとならざるを得ず、〔Ⅰ〕は不可知論的懐疑にさらされ、〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕より成る「知覚表象説」はそれ自身の内部に「自駁性」を有する不整合な理論である——大筋以上のような批判が加えられてきた。

以上の批判に対して哲学史上採用されてきた有力な対応の一つに「現象主義」(phenomenalism)がある。これは内的なものとして「種的に」(specifically)異なる外的なるものを原理的に認めず、世界を内的表象に一元化する。だが、これを採用するBerkeleyが等しく内的な「観念」を「実在的」とそうでないものに<sup>(2)</sup>、またHumeが知覚を「内的」、「外的」と二方向へ分化したといこと<sup>(3)</sup>、すなわち等しく内的なるものの中に更に内的-外的という二極分化を敢えて行っているという事実の中に問題の解決が延期されたまま残っていると考えられる。

更に今一つの対応として、「表象説」を一つの「仮説」(hypothesis)として採用しようとするものもある<sup>(4)</sup>。この場合、上記の「自駁性」は承認したうえでのものであると考えられる。また哲学史上体系だつては現れぬとは言え、「素朴実在論」(naive realism)も一つの採り得る途であろう。

§ 3 さて私が本論稿に於いて試みるのは、以上のような問題意識のうえにたつて次の諸点を明らかにすることである。つまり哲学史上Descartesと並んで知覚表象説の一つの原型——後世への強力な影響力を有する——を形成したと思われるロック(John Locke)の外界認識理論が如何なるものであったかということ、そしてそこには如何なる問題があり、ロックが行った解決が如何なる有効性と限界を持っていたかということ——以上をロックの主張を整合的に解釈する作業を通じて明らかにすることである<sup>(5)</sup>。

#### (一) 観念、精神、実在的事物

§ 4 本題に入る前に、物体、精神などに関するロックの認識論上の基本的枠組を、主にEssay Book II、「観念について」を手掛りとして確認しておこう。

ロックはEssay Book Iで有名な生得観念批判、精神の「白紙(タブララサ)説」の提示を行つて観念の起源に関する消極的説明を与えている。続くBook IIは、その「白紙」としての精神の中に我々が如何なる起源から観念を獲得するかということが積極的に示される。それは「一語で経験から」(II、1、2)という有名な言葉のうちに示されている。ロックはこの「経験」を「感覚」(sensation)と「内省」(reflection)とに分ける。これらは「通路」(passages)とか(II、11、17)、「窓」(windows)であるとされ(同)、そしてこれらを通じる先は、各々「外的感覚的事物」(external sensible objects)であり「精神の内的作用」(internal operations of our mind)である。

§ 5 ここでロックが一般に対象を知るとい場合には、二つの系列が成り立っていることがわか

る。一つは〈外的事物—感覚—観念〉という系列であり、もう一つは〈精神の内的作用—内省—観念〉という系列である。第一の系列は所謂知覚の因果的説明に相当する。ロックはこれを外的事物—感覚器官—神経—脳—観念という順に力学的運動の伝達が因果的産出という仕方で行なわれていく系列であるという。外的事物が「感覚」(senses)を「触発」(affect)することによって、身体的過程としての「感覚<sup>6)</sup>」(sensation)が惹起され、この身体運動としての感覚が脳過程に至るまで伝達されるのである。

以上の説明は、外的事物から脳に至るまでの物質的世界の中では有効性を持つが、脳と観念との間ではこの説明は妥当性を欠くと思われる。なぜならロックは精神の外の物質的、身体的過程と、精神の内の過程の間に根本的な異質性を与えるからである<sup>7)</sup>。両過程間にはいわば越えがたい溝が存在するのである。当然の事ながら、ロックにとってこの観念産出のメカニズムは不可知なものであることになるが、このことによって我々の精神に現前している観念の確実性は消えるものでないという(Ⅳ・11,12)。現前する通りに観念があるということは不可疑のことである。

こうしてロックにあっては、外的事物から始まり脳に至る「物」の世界と、観念がその中にある(現前する)という「精神」の世界とが相互に明確な仕方に関連づけられぬままに、疑いもなく存在する二世界として想定されている、ということが確認できる。

§ 6 次に第二の〈精神の内的作用—内省—観念〉の系列について考察する。注意すべき事は、内的作用がそこに在る場としての精神と、観念がその内にある場としての精神とは別個のものでないという事である。従って内省とは、精神が自らを対象化する機能である。対象化された諸機能は、Book II, 9~11章に列挙、説明される。「知覚」(perception)「把持」(retention)「識別」(discerning)「比較」(comparing)「複合」(compounding)「名づけ」(naming)「抽象」(abstraction)等がこれに相当する。尚精神の諸機能を対象化する内省の機能それ自身は、内省の単純観念のリストの中に含まれず、自らは対象化され得ぬが他を対象化する精神の根拠的機能であると考えられ得る。

大筋以上の様にして与えられた枠組から、精神に観念が疑いもなく現前し、他方精神の外には因果作用が支配する外的事物の世界が疑いもなく存在する、そして両世界は全く異質であり、両世界の関係はpositiveには知られずただ後者が前者を産出するという点が主張されるに止まっている—以上以上の事が確認できた。

## (二) 第一性質、第二性質とその観念

§ 7 次に我々は、(一)に於いて確認できたロックの知覚の因果的説明が、どのような意図と根拠をもって主張されたかということ、そしてその主張を我々が如何に評価すべきかということの検討に移ろう。その目的のために適切な題材となるのは、Book II, chapter 8の感覚の単純観念についての追加的考察である。この箇所<sup>の</sup>の考察は(実は(一)で確認された内容もそうであるが)我々に現れる限りでの事物<sup>の</sup>を記述する‘historical, plain method’(introduction)の範囲を越えるが、感覚の本性の解明や、観念と性質との区別を行うためには、こうした「本題から離れること」が必須のものであると位置づけられている(Ⅱ, 8, 22)。

さて、その箇所はまず「欠如的原因」(privative causes)と「積極的観念」(positive ideas)についての予備的考察から始まる。それに依ると観念は、それ自体としてはすべてpositiveでrealであり、原因が欠如的であっても積極的観念を産出し得るといふ。この際の原因の「欠如」、「非欠如」の基準は、原因の存在にあるのではなくて類似する原因の存在にある。観念の探求と、それをひきおこす原因の探求とは別個のものである。この予備的考察は、Book II, chapter 8の全体に亙るロックの意図が「全観念は外的原因の類似物である」と見做す素朴実在論に対して自説(科学的実在論)を対置する点にあるということを示している。こうして観念それ自身と、外的原因の産出結果としての観念が区別され(II, 8, 7)、観念を後者の視点から分析することによって自説が確立されるのである。

§ 8 以上の視点から、哲学史上周知の性質と観念との区別、性質の三種類への分類が行われる(II, 8, 8~11)。性質とは外的事物の中にあつて我々の精神の中に観念を産出する「力」(power)のことである。「第一性質」(primary qualities 以下P. Q. と略記)「根源的性質(original qualities)」は、「物体がおおよそ如何なる状態にあろうとも、物体から切り離すことが全くできぬもの」(II, 8, 9)であり、これは巨視的物体のみならず、微視的で直接感覚不可能なものにも備っていると推定されている(麦粒を分割する例)。この性質のリストは、文脈によって多少の変動があるが、「固本性」(solidity)「延長」(extention)「形」(figure)「可動性」(mobility)、「運動と静止」(motion and rest)「数」(number)「位置」(situation<sup>(8)</sup>)が挙げられている。

他方「第二性質」(secondary qualities, 以下S. Q. と略記)つまり「感覚的性質」(sensible qualities)は、「実際には対象自体の内に於いては、対象の第一性質によって……我々の内に様々な感覚を——たとえば色、音、味等の——を産出する力ではない」(II, 8, 10)ものである。

注意すべきことは、ロックが‘primary’‘secondary’と言う時の意味が、‘primary’とは‘secondary’なものに比してよりoriginalであり、そこに他のものが還元され得るものであり、逆に‘secondary’ものはよりoriginalなものへと還元されるという点にあることである。そしてこの意味は「性質」についても、更にまた「観念」についても妥当する基準である<sup>(9)</sup>。

最後に「第三性質」(tertiary qualities)が挙げられる。それは上述の二性質とは異なり、知覚者(percipients)を慮外に置いた、外的事物相互間の因果的産出を惹起する力である(例、火の熱は口ウを溶かす力を有する)。

§ 9 次に精神の内に観念が産出されるメカニズムの説明が行われる。まず説明の前提となる考えとして、(1)「粒子仮説」(a corpuscularian hypothesis) (2)「衝突」(impulse)による運動伝達、(3)遠隔作用の否定があると思われる。そしてP. Q. の観念について、単独で感覚され得る程に充分な大きさを持ち遠隔して存在する外的事物は、そのP. Q. が知覚されているという事実が無根拠に提出される。上の三前提を使つての説明は、いわばこの事実よりの類推であつて、観念産出の過程の説明としては循環していると言わざるを得ない。P. Q. とその観念の間関係の把握に関して言えば、結果的にロックの主張と素朴実在論のそれとは一致しているのだが、ロックの説明はそうした一致のある部分では論理の牙が見られない。しかも三前提に基く力学的説明は脳過程の次の精神には及び得ぬものであるという、我々が(一)で既に確認した不十分性を持つものと言わざるを得ない。

他方 S. Q. の観念産出の説明に於いては、脳過程、精神間の切断性が、性質と観念との間の非類似性ということを根拠として自覚されており、ロックはその際性質と観念とを結びつける根拠を「神」(God) に求めている(Ⅱ, 8, 13)。だが S. Q. で言われている切断性は、また神は、P. Q. の場にも等しく妥当するものである。

§10 ロックは更に、以上のことから明らかに、観念と性質との間の類似性に関する次の帰結が導かれ得ると見做す。つまり「物体の第一性質の観念はその性質の類似物 (resemblances) であり、その観念の原型は物体そのもののうちに実在的に存在する。だが第二性質によって我々の内に産出される諸観念は原型と全く類似しない」(Ⅱ, 8, 15)。P. Q. の観念はこの意味で「事物がそれ自身において在るがままの観念」(an idea of the thing as it is in itself) と呼ばれる(Ⅱ, 8, 23)。だがこれらのうち「類似」は、「以上のことから」は結論され得ない。産出過程の説明(特に P. Q. の観念に於いて)の場合と同様、事実が、根拠づけられぬままに述べられているのである。

他方「非類似」については、素朴実在論に対して、(1)「痛み」等との共通性に依る議論(Ⅱ, 8, 16, ~18)、(2)知覚の相対性からの議論(an argument from relativity of perception)(Ⅱ, 8, 19~21)という論理的反駁を加えることによって根拠づけが行われている。このうち(2)の論の組み立ては次のようになっている。(a)我々が外的事物から因果的産出の結果として精神の内に受けとる観念は、物的過程の変化や身体的条件に依って変化する。(b)同一の斉一的事物が、そうした条件に依存して多様なあり方をするとすることは矛盾する。(c)従って事物についての或る任意の観念が、斉一性をもって存在する事物のあるがままの現れである、つまり類似物であるということではできない。

我々は以上の(a)~(c)によって、事物の S. Q. (実際は微小部分の P. Q. に還元されるが)は物理的、身体的過程に依存する潜勢的、待機的(dispositional)な性格を持ち、事物に固有のものではなく、観念あるいはそれを持つ知覚者との関係に於てのみ意味をなすという理由で相対的(relative)な性格を特徴とすると考えることができる。ロックは以上の論理によって類似性の否定を導き出したのである。

だがこの論理が本来導き出すところは、問題となっている性質-観念の間の類似、非類似のいずれか一方を断定することではない。それは、任意の観念を「類似」を持つものとして特例化すること、したがってそれ以外の観念は「非類似」であると定めることを否定するのである。つまり類似、非類似のいずれとも断定し得ぬという不可知論的懐疑がその帰結である。ここには論理の飛躍が見られる。

P. Q. に於いて「事実」として主張された類似性や、S. Q. に於いて誤って推理された非類似性は‘physical consideration’による説明で補強されてはいる(Ⅱ, 8, 21)が、これも結論を前提として認めるとするところ説明することもできる、というレベルに止まっている。

更にまた、(1)、(2)の二つの論理は当然のことながら、P. Q. とその観念の間にも妥当することであるが、ロックはこれを見落している。

§11 さて Book II, chapter 8 の以上の考察を批判的に検討する限り、我々が有する観念が外的事物をありのままに把えている観念であるということの所以は以下の点に在ると考えられる。つまり究極的には神によって形而上学的に根拠を付与された、外的事物よりの因果作用の結果である、

という点である。少くとも整合的にロックを解釈する限り、この結論が出ざるを得ない<sup>100</sup>。

### (三) 観念の実在性、十全性、真について

§12 (二)で我々は、ロック解釈に基いて、観念が「事物についての観念」であると言われ得るための基準を仮説的に示しておいた。ところでEssayの中にはこの仮説を立証するに足る記述が見られる。それはBook II. chapter 30～32の箇所である。

「観念は、観念がそこからとられ、また観念がそれを表象していると想定されている事物との関連に於いて」次の三様に区別される(II, 30, 1)。

(1)実在的 (real) ↔ 空想的、妄想的 (fantastical, chimerical)、(2)十全 (adequate) ↔ 不十全、(3)真 (true) ↔ 偽 (false)。そしてロックは、P. Q. の観念のみならずS. Q. の観念も含めて単純観念は実在的で十全で真であると性格づけている(II, 30, 2)。これは如何なる意味に於てであろうか。

実在的観念とは、「自然の中に基礎を有するもの、事物の実在的な存有や存在 (the real being and existence of things) つまり観念の原型と合致を有する (have a conformity with) もの」(II, 30, 1)である。注意すべきは、S. Q. の観念が「実際に存在するものの心像もしくは表象 (the images or representation)」ではないことは認められつつ(II, 30, 2)、それが実在的でもあり、従って「原型と合致」しもすると規定されている点である。つまり我々が(二)で分析した観念一性質間の「類似性」は実在性の基準の中には含まれていないのである。実在性と等置される「原型との合致」の意味内容は別の点に、つまり「我々の外の事物の力の結果」であり「我々の作り主が我々の中にその感覚を産むように定めた結果」である点にある(II, 30, 2)。すなわち「実在性とは、観念が実在する存在者の別個な構造とゆるぎない対応 (steady correspondence) を有する点にある」(II, 30, 2)のである。そしてこの実在性によって我々は実在する事物を区別し得るのである。単純観念の実在性は、単純観念が知覚者自らによって産出され得ぬという意味で恣意性を免れているという特徴と深く関り合っている。

尚、複雑観念は、人間の精神が自由に単純観念を集成し、それに一般名 (general name) が付与されたものという性格を持つので実在的でない場合が生じ得る。「混合様態」(mixed modes) と「関係」(relations) については、対応する事物を自然の内に持たず、その実在性は観念を持つ精神のうちであり、つまりその観念集合が「不整合」で論理的に矛盾を有するものでない限り実在的である(II, 30, 3～4)。またそれらの観念は、それに付与される「名前」との関連で実在性を失う場合もある。「実体」(substance) の複雑観念は、精神の自由な集成でありつつ外的事物との関連を持つので、不整合である場合に止まらず「事物の存在と合致」せぬならば実在的ではない<sup>101</sup>(II, 30, 5)。

この様にロックは観念が受動的に与えられている、換言すれば神に根拠づけられた対応の結果であるという場合はすべて実在的であり、更に能動性が働く場合にも事物と合致すれば実在的であると規定するのである。

§13 実在的観念は十全と不十全とに分れる。観念の十全性の基準は「原型を完全に表象する点に

ある（Ⅱ，31，1）。原型が部分的にしか、つまり不完全にしか表象されぬ場合には不十全である。ロックは実在性の場合と同様、全単純観念は十全であるということの根拠として、神が対応する観念を（完全に）産出するように定めたところの事物の結果であり、それに対応しているということ（Ⅲ，31，2）。このことから、ロックにあっては受動的に受け取られた観念はそのことに依って即一様に、自動的に事物と偶無き合致を保障されていると解することができる。観念の受容に於けるこの特徴は神による対応づけという特徴と一体のものである。

実体観念の十全性については、「実在的本質」（観念構成の根拠となる事物の内部構造）および「存在する事物に発見できる諸性質」の観念という異なる二者、つまり実在か可能的現象の集合かのいずれかとの関連の中で考えられる。そして前者については「実在的本質」そのものの不可知性を理由として十全性は保証され得ぬとされる（Ⅱ，31，6）。後者の場合も実体観念が可能的現象の完全な「模写」（copies）であることは、一物体を取って見た場合ですから不可能であり（Ⅱ，31，8）、全物体ではなおさらできず、実体観念はいずれにしても十全ではあり得ない。こうして形成に際しての知性の能動性というファクターが介在する実体観念にあっては、受動的受容を特徴とする単純観念とは全く逆の結論が引き出されている。

§14 単純観念は「或る実在」（some real existence）と合致するという意味で真であると言われるが、その根拠も神による「確立された法則と途によって」（by established laws and ways）事物から産出され、「力に対応している」（answering those powers）という点にある（Ⅱ，32，14）。つまり単純観念が受容される際の精神の受動性は、神の介在のしるしであり、それは観念をひきおこしている外的事物と観念との合致を即保証するのである。と同時に「事物と観念との合致」という真理の基準は、ここでも対応という事を実質内容としていることが示されている。

§15 こうして、ロックに於いて外的事物を把握していると言われるにふさわしい観念の基準は次の諸点に要約できる。

- (1) 受容に際して精神が全く受動的、不随意的であるということ。
- (2) 外的事物の性質を原因として産出される結果であるということ。
- (3) この因果関係は神に根拠づけられる法則的対応の関係にあるということ。

以上三点はロックの知覚の因果的説明の基本的特徴をなしており、それは相互作用を否定する一方向的で、かつ知性の意志的能動性の要素を排した機械論的な因果概念と、その因果的決定性の形而上学的根拠としての神の設定とを暗黙の前提として含んでいる。

ところでロックにとってこの「神」は、外的事物の認識理論の内部での急場を凌ぐための単なる「機械じかけの神」（deus ex machina）にすぎなかったとは断定され得ない。ロックはEssayに於ける最大の関心が、神を知り自分自身の義務を知ることにあるとし（Ⅱ，7，6，Ⅱ，23，12）、またEssayの人間知性の探求の動機が、人間の知り得ることと、知り得ぬことの確定という点にあるとした（The epistle to the reader）が、人間知性の及び得ぬ領域を自らの信仰の神に任せた事は、ロック自身にあってはいわば必然的結果であった。

#### (四) 結 論

§ 16 さて以上でロックの外界認識理論のうち因果的説明つまり序の〔Ⅱ〕にあたる部分のやや詳しい検討を行った。次に我々は、以上の内容が序の〔Ⅰ〕との関係から生ずる問題を検討する。

序の〔Ⅰ〕に相当する叙述はEssayの中に繰返し出現する。代表的な事例を拾ってみると、まず観念一性質間の対比に於いては、「知性はこれら〔諸観念一筆者補充〕を眺める際に、これらすべてが判明で積極的な観念であると考え、これらを産出する原因を覚知 (take notice of) しない」とされる(Ⅱ, 8, 2)。さらに一般的に「精神は事物を直接には知らず、事物について精神が持つ観念の介在によって知るということは明らかである」(Ⅳ, 4, 3)。Essay以外では「像」(picture)という語を用いて、「或る事物の像が表象するところのものを私が決して見ぬ時に、私は如何にして知り得るのか<sup>12)</sup>」とも言われる。またEssayの最終章には、「精神が観想する(contemplate)ものは、精神自身の他にはどれも知性に現れぬから、或る別の事物が、精神の考察する事物の印もしくは表象(a sign or representation)として精神に現れる必要がある」(Ⅳ, 21, 4)という。以上約言すれば、〈外界認識に際して精神に直接与えられるのは、外的事物の代理としての観念であり、精神はこれを介して間接的に外界を知るにすぎない〉ということである。

§ 17 だが以上の見解は、我々がこれまでに見てきた諸点を踏える限り、「外的事物についての把握をする認識」が成立する可能性を全く塞いでしまうというわけではない。事実、上の(Ⅳ, 4, 3)の引用箇所直後でロックは、「我々の知識はただ我々の観念と事物の实在との間に合致がある限りで実在的である」としながらも、単純観念はすべて実在的である、という例の主張を繰返すのである。つまり「合致は」は神に根拠づけられた対応へと実質的な意味の変更が加えられ、その対応説の保証する限りでの「外的事物を把握する認識」の成立が言われているのである。そして前章で確認したとおり、この対応説に於ける観念の实在性の成立には、観念に対する精神の受動、能動という点が深く関り合っている。単純観念受容に於ける精神の受動性は、それが神の定める対応の結果であることに結びつき、実体の複雑観念を構成するに際しての精神の能動性は人間の恣意性が介入する可能性に結びつけられていた。

だがロックに於いては、単純観念受容に際しての精神の能動を肯定する箇所が見られることも確かである。例えば感覚の単純観念としての「固体性」や「形」の観念の成立には能動性の関与が明示されている。「固体性」の観念は日常的知覚に於いて見出されるほか、論理的推論や実験によって得られる(Ⅱ, chapter 4)。「形」の観念は、縁取られた末端諸部分に視線を走らせ事物相互間、事物内部での関係を看取することなしには成立しない(Ⅱ, 13, 5)。更に注目すべきは、この関係的性格は「形」に限らず「延長」、「持続」、「数」、「運動」の観念の場合にも全て備っているものであり(Ⅱ, 21, 3)、従ってそれらの観念の形成には関係を看取る精神の能動作用が必要である。また物的・身体的過程が成立しても、精神が(例えば音の)単純観念に気づかぬ場合があるという(Ⅱ, 9, 4)。更に有名な「モリノー問題」との関りで、「我々が感覚によって受け取る観念は、成人にあってはしばしば判断によって変更されるが、我々はこのことに気づかぬ」(Ⅱ, 9, 8)としているが、この「変更」は迅速に行われるため、「判断の観念」は「感覚の観念」と取違えられ、後者はそれ自体滅多に覚知されぬという(Ⅱ, 9, 10)。一般に視覚だけでも「補償運動」、「追



随運動」、「眼球調節及び輻輳」という身体運動が不可欠であることを心理学の知見は明らかにしている<sup>13</sup>。ロックは外的事物に対する身体の（通常は無意識の）能動的運動及び精神の無意識或いは意識の能動性を、単純観念の受容というレベルに於いても不可欠の要素として関わらせているのである。このことから、全き受動性を根拠として提出された全単純観念の実在性は、実際には受動と能動との拮抗関係の中で把え直されるべきであり、この事情は実体観念の場合と同じであると思われる。

§18 物質と精神との関係をめぐって仮に一元論的解決が成されたとしても、そのことは直ちに精神の機能としての意識が（外界認識に際して）外的事物を客観的に把握し得ることを導くものではない。外界の認識という事態は、認識対象としての外的事物と認識者の（同じく物としての）身体との間の物質的相互作用によって成立するとはいえ、その認識者に与えられるものは差当り私的（private）で、局部的で、主観的なものに止まっている。認識という文脈の中での物質と精神、つまり物質と意識とは対立的なものとして把握されねばならない。この主観性を帯びた（この事情は全観念で共通であるが）所与を介して我々は外的事物を間接的に認識する。そしてこの所与に対して何かが媒介的に加わることで、我々が外的事物を直接的に認識すると言い得る品位が成立するのである。ロックのEssayに基く限りこれに相当するのは知性の能動性ということであった。一般に、知性の能動性の強調は「外界認識の客観性」についての機械論的理解に対する有効な対置ではあっても、同時にそれは、我々の知性が恣意的構成によって世界を産出するに至る危険を常に孕んでいる。問題の解決としてはこれは明らかに不十分であり、そしてそれは次の点での制限に由来している。

- (1)問題の解決が知性の枠内に限定されていること。つまり現実の世界の中で生活し、行為し、実践する人間の営為全体が媒介として把えられるに至っていないということ。
- (2)この人間の営為全体の中で把え直された知性の認識、とりわけ上述の媒介者としての能動作用の具体的過程の分析がされなかったということ。

§19 このうち(1)に関して、認識過程への部分的、外的媒介者としての生活、行為、実践という把え方は問題を真に解決するものではないと思われる。この把握に基く限り、認識の真理性的最終的確認は、現実の知覚であり、問題は解決を見ぬまま出発点へ戻ってしまう。問題の解決は、生活、行為、実践の部分的過程としての認識という把え方にあると思われる。

(2)に関して、既にカント（I. Kant）が経験的对象の成立の根拠を詳細に明らかにしている（カテゴリーの超越論的演繹）。だがカントにあっては、対象認識の客観的実在性の根拠は、表象流（直観の多様）を純粹悟性のカテゴリーに依って（このことが直ちに普遍的妥当性と必然性を保証する）統一するという主観の機能の正確さのうちに求められている。感覚は物自体がGemüt（心性）を触発した結果であるという感性論冒頭の知覚の因果説は、この主観的構成の客観的妥当性の説明と関係づけられていない。我々が本論稿で問題化したのはまさにこの問題であった。カントは能動過程の分析を具体的に行ったが、その根本にある問題を不問に付したままそれを行ったのである。

以上で外界認識理論に於いて解決されるべき問題点の一端が、ロックに即して示されたと考えられる。ロック自身の解決は決して十分なものとは言えぬが、問題自体が哲学の基本的な問題であり、後続

の哲学者達の多様な展開は少なからずこの問題との関りの中で行なわれたとも言い得るのである。

註

- (1) 講座「現代の哲学」(有斐閣)Ⅱ、分析哲学より「意味と検証」(大森荘蔵) P. 103.
- (2) Berkeley. A Treatise concerning the principles of Human Knowledge. Part 1. 28~33.
- (3) Hume. A Treatise of Human Nature. Book 1. Part 4. § 2 「感覚の懐疑について」
- (4) J. L. Mackie. Problems from Locke. (Oxford University Press. 1976) P. 63.
- (5) 以下ロックのテキストからの引用は、断りが無い限り An Essay concerning Human Understanding. よりのものとする。(Ⅱ, 2, 3) は同書、Book Ⅱ, chapter 2, 3 よりの引用であることを示す。
- (6) ロックは「感覚とは、知性の内に或る知覚を産み出すような、身体の或る部分に作られた刻印 (impression) や運動」であると強調する(Ⅱ, 1, 23)。(引用中の傍点はロック自身の斜字体による。以下同様とする)
- (7) 「我々が想い得る限りでは、物体は物体を打ち影響を与えることができるだけであり、そして運動は、我々の観念が最終的に届くところから従えば運動を産出し得るのみである(Ⅳ, 3, 6)。
- (8) ロックは第二性質を第一性質に還元するが、その際このリスト以外に「[感覚不可能な微小部分の]構造」(texture) を挙げることがある(Ⅱ, 8, 10)(Ⅱ, 8, 14)(Ⅱ, 8, 18)。また斑岩はそのような色の観念を産出する「微粒子の配列」(configuration of particles) を持つともいう(Ⅱ, 8, 19)。粒子相互の配置関係規定がリストに入るのは、第二性質よりの還元という文脈に於いてである。
- (9) 「他のすべて[の観念]がそこに由来し、そこから作られるところの我々の根源的観念」(Ⅱ, 21, 75) という言い方がある。つまり他の全観念がすべて分析的に導出される観念が 'primary' で 'original' である。ロックは延長、固定性、可動性(以上感覚より)、知覚可能性、発動性 (motivity) (以上内省より)、存在、持続、数(以上双方より)の観念を挙げている。
- (10) この場合には上述の類似性は、事物の客観的認識の基準としては不要なものとなる。この「類似」については疑念を提出する解釈者が圧倒的に多い。c.f. Bennett. 'Locke, Berkeley, Hume, central themes.' P. 106. また小池平八郎氏は『英国経験論における外界存在の問題』において、諸観念の中で触覚の観念との一致に類似を解消しようとする(同書P 18~19)。
- (11) 実体の複雑観念が「我々の外の事物の実在」に合致するか否かとは、ロックにおいてはその観念が外的事物のあるがままの「形像、表象」であることを意味せず、現象との合致を意味する。(Ⅱ, 30, 5) でロックは所謂ケンタウロスのような生物が「存在し得るか否か」は我々には知られることなく、「存在する範型で我々の知っているもの」(白丸傍点筆者による)に合致せず、「いかなる実体もそれらが共存するということをおぼろげな観念の集合」から成るので imaginary であるとする。Book Ⅲで実体観念をより完全なものとする為に「事物そのものの本性や諸特性」を探求し「自然誌」(natural history) を探求することが必要だとしている(Ⅲ, 11, 24)のもこの意味に於いてである。およそロックが「原型」という場合には事

物それ自体、可能的現象の総体という二義がある。

- (12) An Examination of P. Malebranche's Opinion of seeing all Things in God. the works of John Looke. vol. 9.
- (13) ホッホバーク『知覚』(田中良久訳) 岩波書店 P 35.

〔哲学 博士課程 2 回生〕

sondern außerhalb seines rationellen Systems einfach als "Tatsache" anzuerkennen.

Der Titel dieser Schrift lautet "Productio und Sequentia". Dies bedeutet die Frage, ob man "producere"(hervorbringen) durch "sequi"(folgen) ersetzen kann. Diese Frage an sich ist eigentlich keine von Spinoza neu gestellte, eigene, sondern eine überlieferte, allgemeine Frage, die seit der Antike unter den verschiedenen Bezeichnungen, wie etwa "Faktum und System", oder "Wirklichkeit und Logik" immer wieder behandelt worden ist. Es läßt sich darum sagen, daß auch Spinoza sich mit einem überlieferten, wesentlichen Thema auseinandersetzt. Der Zugang, den er dabei wählt, ist aber doch ein bei ihm spezifischer, nämlich geometrisch-logischer. Und gerade hierin liegt der Grund, warum sein Versuch, den Übergang vom Unendlichen zum Endlichen zu beleuchten, letzten Endes ohne Erfolg bleiben muß. Sein geometrischer Rationalismus hängt mit seiner speziellen Auffassung des Begriffs "necessitas" und seiner eifrigen, oder sogar hartnäckigen Zurückweisung der Begriffe "voluntas" und "causa finalis" zusammen. Die in seinem Verständnis in dieser Hinsicht gezeigte Enge und Einseitigkeit deutet gleich auf die wesentlichen Grenzen des Spinozismus überhaupt hin, und deshalb mußte sie später von Leibniz kritisiert, dann überwunden werden. Dadurch, daß er sich gegen die mögliche Gefahr eines Akosmismus bei Spinoza ausdrücklich kritisch absetzt, gelingt es Leibniz, die Mannigfaltigkeit dieser endlichen Welt zu retten, und die Welt und das Individuum in einer völlig neuen Konstellation aufzufassen.

## **Ideas and Reality in Locke**

*by Kenji Otsuka*

In this article, I have tried to make clear the theory for the knowledge of the external world, by examining Locke's 'Essay'. The so-called 'representative theory of perception' which was set forth by Locke in the typical form — what characters and problems does it have? And is it truly valid as the theory for the knowledge of the external world? It is our central aim to answer these questions.

According to Locke, our ideas are in our mind, and outside the mind there is an external, material world which is subject to the causality. These two worlds are quite foreign, and the latter produces the former.

After examining Book 2. Chapter 8. of the Essay, which contains the famous descrip-

tion concerning the primary and the secondary qualities, we found that the ideas which apprehend the external object as it is in itself have following characters. That is, the characters that they are effects caused by the external objects, and that the causation is based on GOD.

On the other hand, we found in the Essay the description which is able to confirm our supposition. In Book 2. Chapter 30, 31, and 32, Locke says that the ground for the reality, adequacy, and truth of ideas consists equally in the following points. (1) That when we receive these ideas, our mind is utterly passive. (2) That they are effects caused by the qualities of the external things. (3) That this causal relation is nothing more than that of correspondence.

In the meanwhile, Locke concedes repeatedly that we know the external world only indirectly by the intervention of representatives i. e. ideas. And furthermore he says virtually that in the reception of simple ideas our mind are not utterly passive. This activity of our mind is supposed to get our knowledge of the external world to release from its indirectness.

But the author thinks that this solution is not sufficient. When we inquire into the condition for the establishment of the objective, real knowledge about the external world, we should remove the limit of 'knowledge', and turn our eyes to the total action, in which the problems of 'knowledge' are to be properly situated. And the problem itself is supposed to be solved only when we think so.

## **Das Problem der Darstellungsart und ihre Voraussetzung in der Kritik der rein Vernunft Immanuel Kants**

*von* Osamu Yoshida

Will man die Hauptschrift Kants „Kritik der reinen Vernunft“ vollständig verstehen, muß er den „Standpunkt“ (oder den „Horizont“) im voraus erklären, den Kant im Anfang der „Kritik der reinen Vernunft“ schon angenommen hat. Denn man könnte sogar die „Transzendente Ästhetik“ als den ersten Teil der „Kritik der reinen Vernunft“ nicht genug verstehen, ohne die Rücksicht auf diesen Standpunkt zu nehmen. In die „Transzendente Ästhetik“, z. B., bringt Kant die Begriffe „Form“ und „Materie“ ohne jede Erklärung und Definition ein. (A 20. B 34) Weder die Bedeutung des Begriffs „isolieren“ (A 22. B 36), den Kant als ein konkretes Verfahren der Forschung in der „Kritik der reinen